3位，第5位にのぼっており，就労状況によってこどもが異なる就学前幼児教育・保育施設に通う現状には保護者は疑問や不満をもっていると言える．

回答順位の第2位には［2）地域のこどもたちが一緒に育つため，地域での友達ができやすい］が位置し，近年の少子化の傾向を踏まえ，地域での友達集団の形成を促進する意味でも認定こども園が評価されている．

また，回答順位の第4位には，［8）預かり時間の自由度が増し，家事や趣味活動の時間をとりやすい］が位置する．さまざまな文献や有識者発言によって，子育て中の母親の孤独や不安，これに起因する乳幼児虐待の危険性などが指摘されており[文1)~3)]，単なる親のリフレッシュ時間をとるためという位置づけにとどまらず，こうした効果も認定こども園導入によって評価されるべき項目であると言える．もちろん，行き過ぎた支援によって不用意に子育ての主体を保護者から社会・施設に移行させるべきではなく，支援の程度には配慮が必要であることは言うまでもない．

高頻度で評価要因となった項目から整理すると，

1）（将来的な）就労を前提として，一時休職を含む働き方の変化に対応できること

2）1）を踏まえて，保護者の就労状況によらずこどもの発達環境を物理的（施設転園の必要がない）・人的（なじみの集団から離れなくてよい・友達集団の形成が助けられる・こどもの区別につながらない）に保障できること

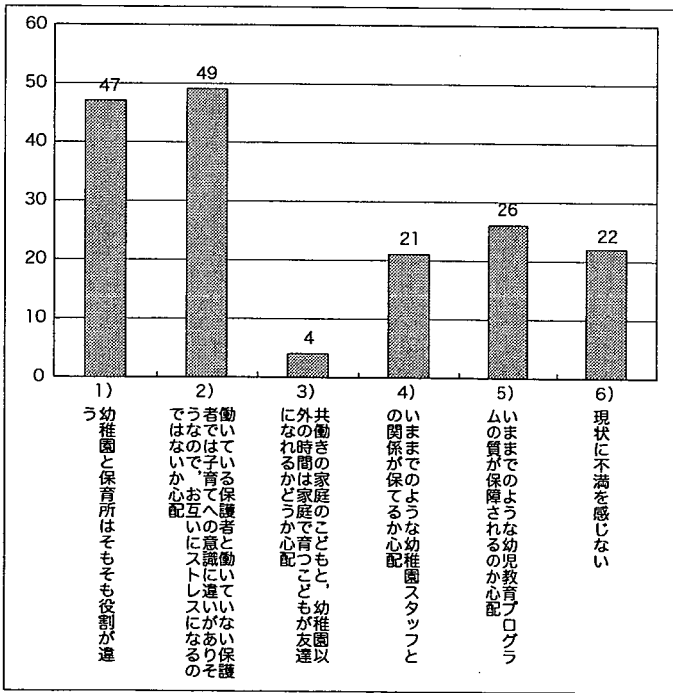
3）家事や趣味活動等，就労以外の理由でも預かり保育の時間・期間（受け入れ年齢）の自由度が増すこと

以上3点が，認定こども園の導入を歓迎する主な理由となっていると整理できる．

C．3　認定こども園の導入には「慎重になってほしい」理由

認定こども園の導入には「慎重になってほしい」または「どちらかというと導入には慎重になってほしい」と回答した世帯に対して，その理由をたずねた結果を図4にまとめた．

回答順位第1位と第2位はほぼ同数で，［2）保護者の就労の有無によって子育てへの意識に差がありそうなので，お互いにストレスになる（49)］と［1）幼稚園と保育所ではそもそも役割が異なる（47)］であった．認定こども園の導入に消極的な世帯の考え方として，幼稚園と保育所の役割意識（幼児教育・友達との遊びの場／就労等の理由で保育に欠ける子の保育）が強く影響していることが分かる．また，自由記述でも複数挙げられた意見と関連して，働いている保護者と



【その他】記載内容
・園の方針、保育者の質が保たれるか不安
・スタッフが多忙になり、(4)(5)が疎かになってしまっては困る。
・子の人数に対するスタッフの割合　詰め込み保育になる心配がある。
・スタッフの負担が重くならないか不安。
・子育てを人任せになってしまう気がします。
・やむを得ず働いている保護者と違い、趣味や自分の時間ほしさで低年齢から預けようとする親もでてくるのではないか？
・働いている親に合わせて、親子参加の園行事が減ったり、子供と関わるはずの親まで保育園にあわせる形で、園に預けっぱなしになってしまうと、親同士の交流がなくなり、育児の楽しみや育児への関心も薄くなるのではないかと思う。
・お迎えの時間が違いすぎる。子供は早く迎えにきてもらうほうがうれしいはず、心のケアに慎重になって欲しいと思う。
・なんとなく、保育所の子供がさみしい想いをしそうなので
・保育園と幼稚園は家族でのしつけが全く違うし、子供の質も全く違う。せっかく家庭でしっかり育ててきたのに保育園児と一緒ではわがままやきたない言葉づかいがうつる。
・認定こども園が子供たちの為になるシステムなら良いが、保護者の都合だけを考えたものであれば必要ない。現状の幼稚園や保育所では保護者の声を受け、変える所は変えるなりして対応している。幼稚園と保育所の差がなくなりつつあるのに同じものは必要ない.
・個人のニーズで園選びをしていると思うので、なぜ認定こども園なのかが理解できません。また、行事への参加率が仕事を持っている母は限られると思いますが、幼い心がどう感じるか不安です。保育所が不足ならば保育所を作ればいいと思う。
・幼稚園内にあるにも拘らず、それぞれの規定、考え方が違いすぎる。園内に設けるのなら、一緒の考え方を持って連携してほしい。(一緒にあることはいいことだと思うが、考え方が違いすぎる。統一してほしい)
・幼稚園では本の読み聞かせやお餅つきイベントなど保護者がずいぶん手伝いをしています。共働きの方ではこういった事への参加も厳しいかと。
・子供たちが集団でふれあう場としてどちらも変わりはないと思いますが、園行事など，親が参加したりする行事など制限されたりしそうです。
・導入には賛成ですが、行事で集まりがあるとき，仕事を理由に参加しない人が出てきたりして親との間でトラブルが発生しやすいのでは？と思います
・同じ園の中でも、幼稚園と保育所は連携が必要だがしっかりスタッフと教室は分けることが必要。すぐ帰れないというだけで子供にとっては寂しいし、いくら小さくとも感情はあるし慎重に！と考えます
・幼稚園での保護者が行う係などで仕事をされている方と専業主婦(夫)の方ではやはり差が出てきてしまった時などあるため。
・仕事をしているお母さんと仕事をしていないお母さんとの間で、いつも何かしらのトラブルがあるので

図4　「導入には慎重になってほしい」理由（複数選択可）

働いていない保護者での子育て意識の違いが，園の行事への参加や園役員の負担などの面で，ストレスになるとの懸念につながっている．自治体と既存の幼保一体型施設へのヒアリングでも，保護者の就労の有無によって行事設定等には苦慮する実態が報告されており[文4)]，認定こども園の計画時には，プログラム，人員配置，建築的対応を含めた配慮が必要であることが確認される．

一方，[5）いままでのような幼児教育（26)] や [4）いままでのようなスタッフとの関係（21)] が保たれなくなるのではないかという懸念は上記2回答の半数程度であり，認定こども園導入によってプログラムや人的環境が損なわれることへの懸念はさほど強くないと言える．

また，こども本人に関わる問題として，[3）共働き家庭のこどもとそうでないこどもとでは友達になれるかどうか心配（4)] を評価理由にあげた世帯は，他の項目に比べて極端に少なく，保護者はこどもたちの遊びや生活の面では保育所のこどもと幼稚園のこどもに差異を感じていないと指摘できる．

以上より，認定こども園の導入に慎重になってほしいと考える理由は，保護者が与えたいと考える教育環境の保障への懸念 [1)，5)] や保護者間の関係への懸念 [2)]，保護者とスタッフとの関係への懸念 [4)] に集約され，こどもたち本人の面からは問題にならない．

D．認定こども園導入への意識と就労意識の関係

上記Cで分析した認定こども園導入への意識が，保護者・世帯の就労意識とどのような関係にあるかを分析する．

D．1　就労意識の分類

まず，現在の家庭の就労状況と，今後の就労意欲の組み合わせによって，以下のように回答世帯の就労意識について類型化を行った（図5）．

①共働き（112世帯）：現在共働きしている世帯

②休職（268世帯）：[かつて共働きだった] かつ [いずれは共働きしたい・する見込みである・してもいい] 世帯

③求職（185世帯）：[共働きであったことはない] かつ [いずれは共働きしたい・する見込みである・してもいい] 世帯

④離職（44世帯）：[かつて共働きだった] かつ [今後共働きはしたくない・するつもりはない] 世帯

⑤専業（89世帯）：[共働きであったことはない] かつ [今後共働きはしたくない・するつもりはない] 世帯

回答のあった723世帯のうち，「現在共働きをしている」と回答した世帯は，17.0%（123世帯）であり，「今後共働きはしたくない」と回答した世帯の18.7%（135世帯）とほぼ同数である．また，回答世帯のうち半数以上を「いずれは共働きしたい・する見込みである・してもいい」と回答した世帯が占めており（457世帯・63.2%），調査対象世帯の就労意欲は高いと言える．

D．2　就労意識と認定こども園導入への意識の関係

図6に，世帯の就労意識と認定こども園導入への意識の関係をまとめた．

「積極的に導入してほしい」と回答した世帯の割合が最も高いのは [共働き] 世帯で（計85.0%），[共働き] 世帯では「わからない」と回答した世帯の割合も最も低く（8.8%），認定こども園への関心の高さとともに，現在共働きでない世帯よりも積極的な導入を望む考えであることが分かる．

逆に，共働きをしたことも，するつもりもない [専業] 世帯では「積極的に導入してほしい」割合が他の類型よりも低く（計56.8%），「わからない」と回答した世帯の割合が高い（30.7%）．「導入には慎重になってほしい」と回答した世帯の割合は，[休職（計11.6%）・求職（計13.5%）・離職（計13.9%）・専業（計12.5%）] でほぼ同割合で差がなく，積極的な導入

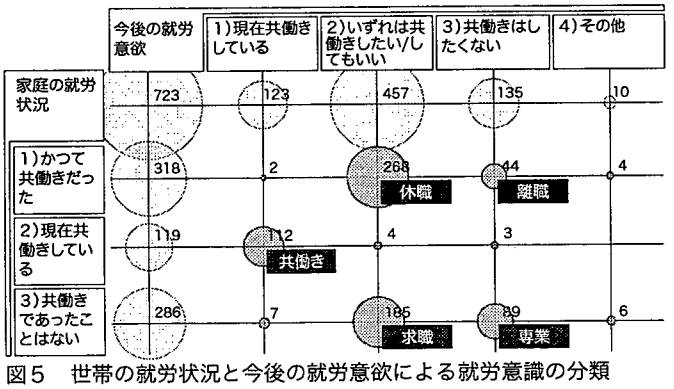


図5　世帯の就労状況と今後の就労意欲による就労意識の分類

を望む程度は，「導入には慎重になってほしい」とする世帯との比率ではなく，むしろ認定こども園への関心の高さによっていると指摘できる．

これを踏まえて，「積極的に導入してほしい」と回答した世帯の割合をみると，[共働き] [休職] [離職] [求職] [専業] の順に高い．なお，この逆の順で「よくわからない」と回答した世帯の割合が高い．認定こども園の積極的な導入を望むかと，認定こども園への関心は，共働き経験があるかどうか（共働き・休職・離職は共働き経験有り）に影響され，また今後の就労意欲の有無をわけて比較すると，共働き経験の有無が影響していると言える．

E．認定こども園を導入してほしい理由と就労状況

上記のように，就労意識の類型が認定こども園の導入への意識に影響していることを踏まえて，認定こども園を「積極的に導入してほしい」，またはどちらかというとそう思うと回答した世帯に対してたずねた，導入の理由と，就労意識の関係をみる（図7）．なおこの図は，就労類型に該当する世帯のうち，その理由を導入理由として選択した世帯数の割合を示している．

導入理由の第一位であった「9）将来的に働きたくなったときに転園の必要がない，働きやすい」を選択した世帯の割合は，特に今後就労する意思がある［休職（23.6％）・求職（22.3％）］で高く，将来的な就労が念頭に置かれた回答であることが確認できる．一方，今後就労するつもりがない［離職（14.1％）・専業（14.8％）］でやや低く，自身の世帯に関連しないため，この利点への評価は低い傾向があると指摘できる．世帯の就労意識等，保育・教育のニーズを踏まえた導入検討が必要であるといえる．

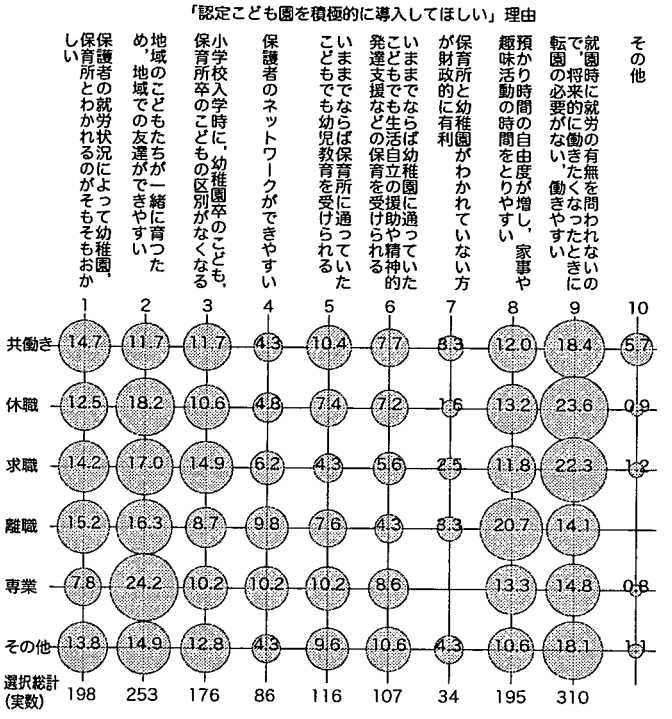


図7 「認定こども園を積極的に導入してほしい」理由と，就労意識の関係（割合表示，ex.［共働き］世帯のうち，理由1を導入の理由としてチェックした世帯の割合）

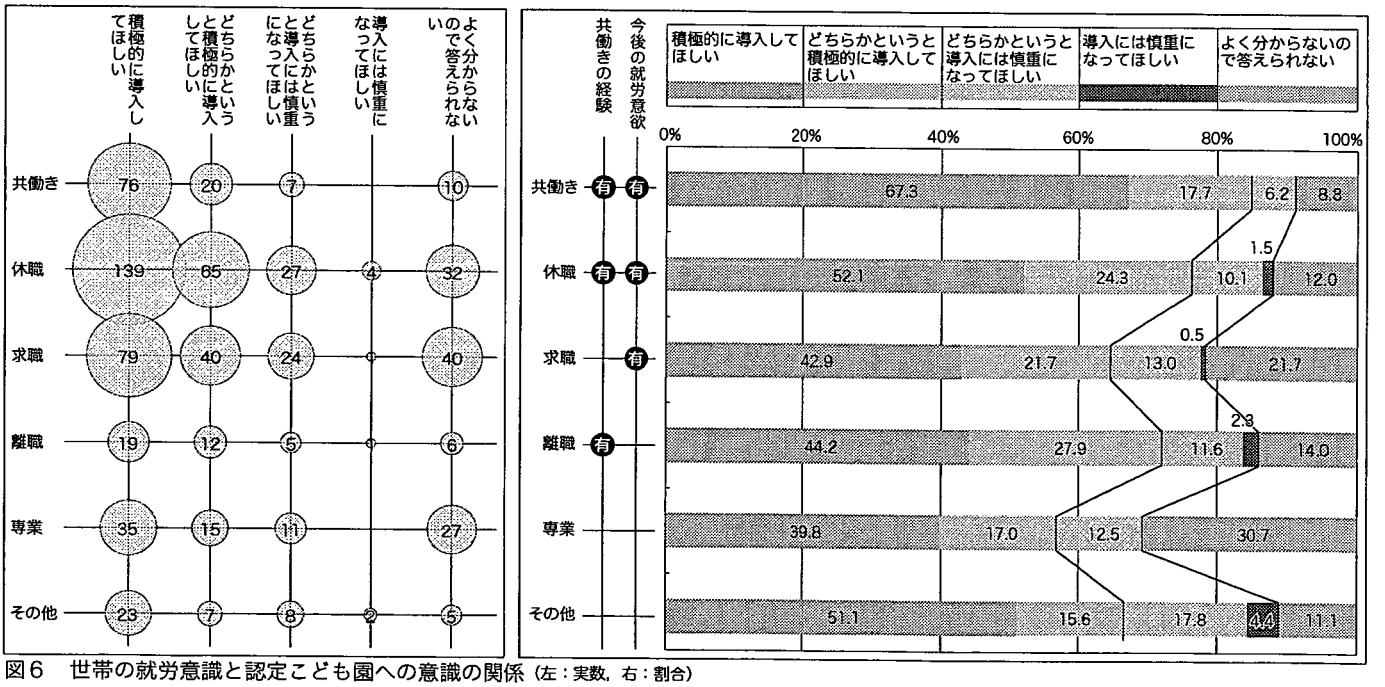


図6 世帯の就労意識と認定こども園への意識の関係（左：実数，右：割合）

また，理由の第二位であった「2）地域での友達ができやすい」では，［専業（24.2%）］で突出して選択した世帯の割合が高く，地域での子育て・子育ちにおいてこどもの友達関係の形成をより重視していることがわかる．逆に，［共働き（11.7%）］ではこの割合が他の類型に比して突出して低く，地域での友達関係にはあまり重きを置いていないといえる．

理由の第3位であった「1）保護者の就労状況によって幼稚園と保育所に別れるのはおかしい」は，［専業（7.8%）］を除いてほぼ同程度の割合の世帯が選択しており（12.5～15.2%），就労経験があるか・今後の就労意欲があるかによって，意見や意識が分かれる項目であると指摘できる．

理由の第4位「8）預かり時間の自由度が増し，家事や趣味活動の時間がとりやすい」は，［離職（20.7%）］で他に比して選択された割合が高く，他の類型ではあまり差がない（11.8～13.2%）．就労経験や就労意欲とは単純な関係はなく，この類型で預かり保育のニーズが他の類型よりも強い傾向があるといえる．

F．認定こども園導入への意識と預かり保育の利用状況

認定こども園の導入の背景として，保育所待機児童の増加や幼稚園の園児数減少にみられるような，保育ニーズの増加が挙げられる．上述C．でも，認定こども園導入に賛成の理由として，預かり保育の利用自由度の向上が影響していた．そこで，幼稚園利用者にとって，預かり保育の自由度の向上がどれほど認定こども園導入への意識に影響するかを概観するため，現在の預かり保育の利用状況・今後の預かり保育の利用予定と，認定こども園導入への意識の関係をみる（図8）．

F．1　預かり保育の利用状況

まず，預かり保育の利用状況を見ると，「利用している」と答えた世帯が44.9%（283/630世帯）で，全体の約半数の世帯が預かり保育を利用している．一方，18.2%（115/630）が，「現在利用しておらず，今後とも利用するつもりはない」と回答している．「現在利用している」「現在は利用していないがいずれ利用したい」を合わせると81.7%であり，利用頻度はそれぞれ異なるが，預かり保育の利用ニーズは高いと言える．

F．2　認定こども園導入への意識と預かり保育利用の状況の関係

図8より，預かり保育の利用状況と認定こども園導入への意識の関係を見る．図8右の割合表示でみたとき，まず，預かり保育の利用状況からみると，内訳：認定こども園導入への意識には，預かり保育の利用状況によって大きな差異がないことが分かる．「積極的に導入してほしい」は，わずかな差で［利用している］［いずれ利用したい］［利用するつもりはない］の順に並んでいるが，3者に明確な差異はない．また，「積極的に導入してほしい」と「どちらかというと積極的に導入してほしい」を合わせた割合では，僅差で［いずれ利用したい］が第1位となって順位が入れ替わる．つまり預かり保育の利用状況の別は，認定こども園導入への意識にほとんど影響を及ぼしていないといえる．このことから，預かり保育のニーズに対応したかたちで

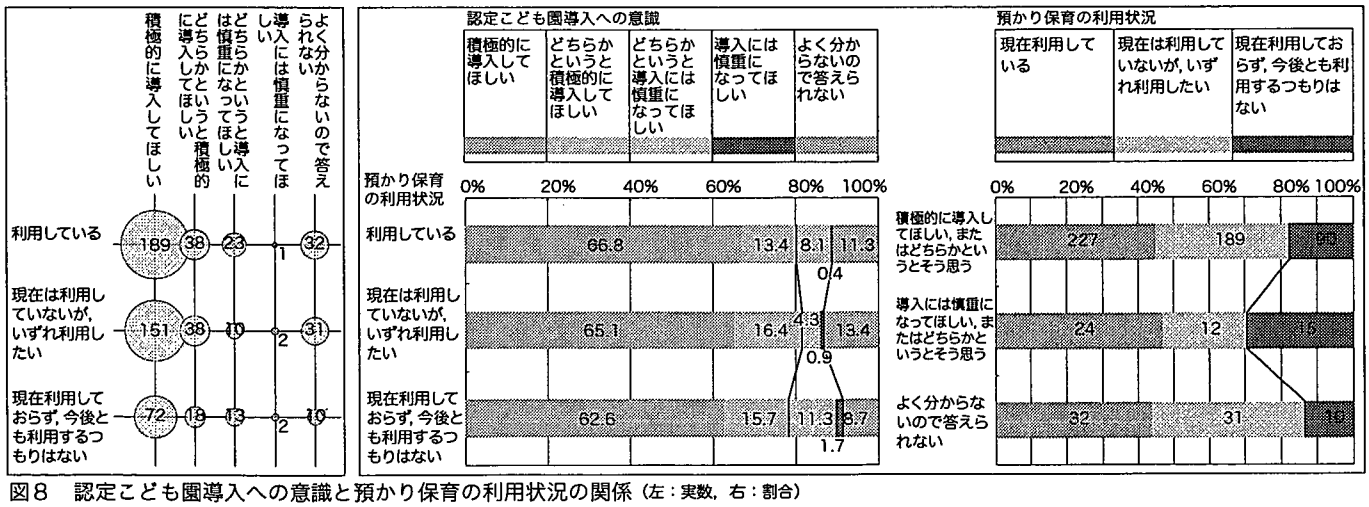


図8　認定こども園導入への意識と預かり保育の利用状況の関係（左：実数，右：割合）

の認定こども園導入という安易な発想によって認定こども園導入への意識が形成されているわけではないということがわかる.

一方，認定こども園導入への意識ごとに，その内訳：預かり保育の利用状況をみると，「積極的に導入してほしい，またはどちらかというとそう思う」で，今後または将来的に預かり保育を利用すると回答した世帯の割合が，「導入には慎重になってほしい，またはどちらかというとそう思う」を10%強上回っている.

以上より，預かり保育を利用しているまたは将来的に利用するつもりがあるからといって，認定こども園の導入意識に明確な差異はないが，認定こども園の導入意識の別によって，預かり保育の利用状況には若干の差異があると指摘できる．これは，認定こども園の導入意識を今後の就学前幼児教育・保育の変革への意識と読み替えれば意義のある結果であり，変革を望む保護者は，預かり保育の利用を望む傾向がある，という構造が読み取れる.

G. まとめ

以上，本稿では，東京都・多摩市の幼稚園利用者を対象としたアンケート調査により，認定こども園導入への賛否意識と，その理由を把握し，今後の男女共同参画社会と社会での子育て支援態勢の構築を見据えて世帯の共働き就労経験や就労意欲の有無や預かり保育の利用状況とこの賛否意識とその理由との関係を分析した.

本稿で得られた知見を，以下にまとめる.

1）認定こども園導入については，「積極的に導入してほしい」または「どちらかというとそう思う」が計72%を占め，多くの保護者が賛同している.

2）一方，12%の世帯が「導入には慎重になってほしい」，18%の世帯が「よくわからない」と回答しており，認定こども園の導入に際しては，不安点や不満点に十分配慮した導入計画と丁寧な保護者説明が求められると言える.

3）導入に賛成する理由としては，①（将来的な）共働き就労を前提として，一時休職を含む働き方の変化に対応できること，②保護者の就労状況によらずこどもの発達環境を物理的(施設転園の必要がない)・人的（なじみの関係の継続・地域の友達集団の形成・こどもの区別がない）に保障できること，③家事や趣味活動等，就労以外の理由でも預かり保育の時間・期間（受け入れ年齢）の自由度が増すことが評価されている.

4）導入に賛成できない理由としては，保護者の就労状況による子育てへの意識差がストレスになるのではないかといった保護者が与えたいと考える教育環境の保障への懸念［1），5)］や保護者間の関係への懸念［2)］，保護者とスタッフとの関係への懸念［4)］に集約される．なお，認定こども園導入によってプログラムや人的環境が損なわれることへの懸念はさほど強くなく，またこどもたち同士の交流関係にも不安はほとんどない.

5）回答世帯のうち，63.2%は将来的な共働きを見込んでおり，調査対象世帯の就労意欲は高いと言える.

6）［共働き］世帯では，認定こども園への関心が他の類型よりも高く，また現在共働きでない世帯よりも積極的な導入を望む考えである．逆に，就労経験・今後の就労意欲がない世帯では，導入賛同世帯の割合が低く，認定こども園をよく知らない世帯の割合が高い．なお，積極的な導入を望む程度は，「導入には慎重になってほしい」とする世帯との比率ではなく，むしろ認定こども園への関心の高さによっている.

7）認定こども園の導入に賛同する理由と就労意識の関係では，今後の就労意欲の有無が理由として選択する項目に影響しており，就労意欲がある世帯では，「転園の必要がない」を多く選択している．一方，［専業］世帯では，地域での子育て・子育ちにおいてこどもの友達関係の形成をより重視している.

8）全体の約半数の世帯が預かり保育を利用している．「現在利用している」「現在は利用していないがいずれ利用したい」は合計81.7%で，利用頻度は異なるが，預かり保育へのニーズは高い.

9）預かり保育の利用状況と認定こども園導入への賛否意識の関係を見ると，預かり保育の利用状況の別は，認定こども園導入への意識にほとんど影響して

おらず，預かり保育の充実のためという図式では認定こども園導入の賛否が評価されていないといえる．

H. 研究発表

H. 1　論文発表

本論文は，立命館大学紀要並びに日本建築学会技術報告集への投稿を予定している．

■参考文献

1）武田信子：社会で子どもを育てる　子育て支援都市トロントの発想，平凡社，2002.11

2）大日向雅美：「子育て支援が親をダメにする」なんて言わせない，岩波書店，2005.3

3）杉山千佳：子育て支援でシャカイが変わる，日本評論社，2005.5

4）山田あすか，佐藤栄治，佐藤将之，樋沼綾子：自治体と旗艦施設へのヒアリング調査による幼保一体型施設の運営実態に関する報告，日本建築学会技術報告集　第25号，2007.6

厚生労働科学研究費補助金（政策科学総合研究事業（政策科学推進研究事業））
分担研究報告書

ノルウェー・スウェーデンにおける保育施設現況
～幼保一元化された国の保育施設に関する調査報告～

分担研究者：佐藤将之（早稲田大学人間科学学術院　助手）
主任研究者：山田あすか（立命館大学理工学部建築都市デザイン学科　講師）

幼稚園と保育所（半日保育と全日保育）が一元化されたノルウェーとスウェーデンの就学前保育施設において，室や家具の面積および寸法の実測調査を行った．また，スウェーデンの1施設において，こどもの活動内容・場所・活動規模に着目した終日観察調査を行った．これらの調査の結果，両国の保育施設では，午睡室やクワイエットルームなどの専用室が設けられており，一人あたりの保育施設面積が日本における基準面積よりも広いことがわかった．また，十分な面積やコーナーが設えられていることや保育者の人員配置等を背景として，施設内での子どもたちの居場所には「一人」でいる場所も多いことがわかった．さらに，スウェーデンの就学前保育施設は，1996年に社会省から教育省へ移管され，それに伴って施設自体の意味が変化している問題点等が明らかとなった．

A．研究目的

現在，日本で認可・認定されている乳幼児施設は，保育所，幼稚園，2006年より始まった認定こども園で構成されている．昨今増加している認定こども園や幼保一体型施設は，所轄の省や設置の基準などそれぞれで環境が異なっている．

一方北欧では，既に就学前保育施設が一元化されている．北欧の中でもノルウェーとスウェーデンは，女性の社会進出度を示す2007年のGEM値が世界でそれぞれ1位と2位であり，社会背景の面からみても特徴的である．そこで，本稿では，ノルウェー・スウェーデンを調査対象として就学前保育施設の現況を調査すると共に，スウェーデンの就学前保育施設「フォーシュコーラ(Förskola)」における生活空間を報告・考察する．

B．研究方法

現地実測調査と文献を主軸として研究を進め，ノルウェーオスロでは3施設，スウェーデンストックホルムでは4施設を調査した．その中の代表的な事例としてスウェーデンの「フォーシュコーラ」では3日間の詳細な調査を行った．スウェーデンの文献の解説や実測調査地の選定にはストックホルム教育大学のイングリッド・エングダール教授にご協力いただいた．その選定の際には，「フォーシュコーラ」となった半日全日保育一元化後のストックストックホルムにおいて，一番数多く設置されているタイプの保育施設の代表例として「バーブローデンフォーシュコーラ」を選定いただいた．ノルウェーでは都市の視点から，1．都心にある，2．移民が集まる，3．住宅群，4．公園内にある，等々の条件から見学地を選定した．訪問時期は，2006年8月下旬であった．

C．ノルウェーとスウェーデンの保育制度概況

はじめに，現地で得た文献と既往文献から両国の保育制度概況を整理しておく．

C-1．ノルウェーの概況

ノルウェーの就学前保育施設は，「バーネハーゲ」(Barnehage）と呼ばれ，1～5歳児の乳幼児を対象としている．ノルウェーでは，1月から12月に満6歳となる児童が，同年の8月中旬から始まる新学期に入

学する．

私立の保育施設がノルウェー全体の保育施設総数の48.4％（2798箇所）を占めている（2001年）．2003年以降，市は利用者のニーズに応じて保育施設を整備することが義務づけられており，「2005年までに育児プログラムへの子どもの参加を望んでいる全ての親がプログラムを利用できるようにすること」が目標になっている．前々文2001年の48％がこれによって変化している可能性がある（文1）．

就学年齢が7歳から6歳に引き下げられたのは1998年である．就学時期は秋学期の初めである．「子ども・家族省」が管轄している．バーネハーゲは，フルタイムもしくはパートタイムの施設であり，ファミリー・デイケア施設もこの中に含まれる．一定の保育施設に席をもっていない子どもなどが，親やそのほかの人と一緒に自由に訪れることのできる「オープン保育施設」(open banehage）と呼ばれる施設もこの中に含まれる．保育施設に対する基本的な法律は「保育施設法」(the barnehage Act, the Act on Day Care Institutionsで，国内保育施設6240のうち，47％が公立，53％が私立（1997年）．施設規模は公立の方が大きい傾向があり，園児数は58％が公立42％が私立である（文2）．

C-2. スウェーデンの概況

スウェーデンの保育施設に関する主な変遷を表1として記す．

スウェーデンでは，1836年に幼児学校（Småbarns-skola）が開かれたとされ，それらは慈善家や教会によって提供されるものであった．その後，1930年代には日本の幼稚園のような半日保育施設（Lekskola）が誕生し，70年代に，別々となっていた半日保育と全日保育がFörskolaとして一元化され，6歳児保育の無料化，保育指針（Arbetsplan för förskolan）が作成されることで，現在の保育施設整備の礎が築かれた（文3，文4）．この時期に最も多くの就学前保育施設が設置されている．

表1. スウェーデンにおける保育施設環境の主な変遷

1836年	私立幼児学校が開設される．
1854年	全日保育の前身，「クレッシュ」が開設される．
1904年	母親が就労していても入れる公立幼稚園が開設される．
1930年代	半日保育施設が開設される．
1975年	半日保育と全日保育が「フォーシュコーラ」として統合される．
1970年代後半	保育施設が最も多く設置された
1996年	就学前保育施設と学校に行く子どものケアは，社会省から教育省に移管された．
1998年	6歳児用の「フォーシュコーレクラス」が学校に設置され，義務教育システムに組み込まれた．

また1996年には，就学前保育施設と学校に行く子どものケアに関する所管が，社会省から教育省に移管された．1998年には，小学校に6歳用の「就学前クラス」ができ，4,5歳児の保育料が無料となった2003年には，彼らの96％がフォーシュコーラに登録し，96％を維持したまま現在に至っている（文5）．一方，保育が保障され始める1歳児から3歳児の登録者は，2005年には75％と低くなっているが，スウェーデン教育大学のイングリッド先生に理由をお聞きしたところ，これは育児休暇制度との関係があるとのことだった．

スウェーデンでは，就学前保育施設は，1976年以来，フォーシュコーラ（＝forskola，「for」は前，「skola」は学校を意味する）とされ，全日保育の呼び名ダーグヘム（＝Daghem，「Dag」は昼，「hem」は家を意味する）も保育施設の呼称として未だに使われている．年度の切り替わりは8月中下旬．その時点で満6歳であれば小学校の就学前学級に通うことになる．

D. ノルウェーとスウェーデンの保育施設の現況

次に現地実測調査による両国の現況を報告する．両国のヒアリングアンケート結果の主な内容を表1にまとめた．個々の詳細については，別途本報告の末尾に記す．

日本とこれら2カ国との違いとしては，

・施設の収容人数が少ない
・ダイニングルーム，午睡室，クワイエットルーム，アトリエ（美術室），などの専用室がある
・［所見］混み合っていない
・縦割り保育（クラス）である
・運営時間が短い

などが挙げられる．

運営時間に関しては，社会システムや就労環境の差異に関係すると言えるだろう．規模（上から3項

目）に関しては，今後の日本の保育施設の課題といえる．待機児童問題が起こっている日本のでは，保育施設は未だ収容施設としての施設環境が強いと考えられる．生活環境としての施設になるべく，様々な検討を行う必要がある．ちなみに，面積を把握できたスウェーデンで１人あたりの施設面積（施設の床面積を人数で割る）を算出すると，３つの施設でそれぞれ 12.5 ㎡，12.3 ㎡，11.84 ㎡となり，やはりゆとりのある空間が確保されていることがわかる．

表 2. 両国就学前保育施設のヒアリングアンケートでの主な回答

国名	ノルウェー				スウェーデン		
施設名	Breigata barnehage	St.Hanshauagen barnehage	Melkeveien barnehage	Bjølsen barnehage	Vårbrodden Förskolan	Förskolan Griffeltavlan	Förskolan Äventyret
1-1) 設立年／認可	不明	1958 年	2006 年８月	1920 年に教会の幼稚園として開設．現名は 1952 年から	1981 年	2006 年４月	2007 年３月
1-2) 現在の建物	集合住宅の１階部分を利用	不明	1881 年に建った住宅を改修して使っている．	1997 年に１階建てだった建物に２階を増築	設立年に建てたと思われる	2006 年４月に新築	2007 年３月に新築
1-3) 敷地面積	集合住宅内に設置．施設は約 1000 ㎡を利用．集住は，約 4500 ㎡	公園内に設置．		隣接する公園との境目に高さ１m 程度の柵	2400 ㎡	3800 ㎡	5100 ㎡
1-4) 建築面積	約 400 ㎡（施設使用部分）		100 ㎡		450 ㎡	859 ㎡	919 ㎡
1-3) 運営（公立／私立）	公立	公立（１９９５年に公立）	公立	公立	公立	公立	公立
2-1) 受け入れ年齢	１歳～６歳	２歳半～６歳	１歳～６歳	１歳～６歳	1-6 歳	1-6 歳	1-6 歳
2-2) クラス構成	１～３歳９名 ３～６歳１８名	年齢順に並べ２クラスに分けている．現在は１７名と１６名の２クラス	１階：１～３歳３５人 ２階：４～６歳３５人	１クラス 18 人 ２クラス 18 人 ３クラス 12 人	１～２歳児，３～５歳歳児の２クラス 合計 36 名	４クラス 合計 70 名	２クラス １～３歳 38 名 ３～５歳 42 名 合計 80 名
2-3) スタッフ数	各クラス３名	boss ２名 先生２名 アシスタント４名	先生７名 アシスタント 11 名	１クラス３名 ２クラス４名 ３クラス４名	先生６名，掃除１名調理１名	先生 12 名	先生 14 名
2-4) 利用料金	市が親の収入に応じて規定	市が親の収入に応じて規定	市が親の収入に応じて規定		市が親の収入に応じて規定	市が親の収入に応じて規定	市が親の収入に応じて規定
2-5) 運営時間	7:30-17:00	7:30-17:00	7:30-17:00	7:30-17:00	06:30-18:00	06:30-17:30	06:30-17:30
2-6) 子どもの通園圏	Gamle Oslo Bydel 内（園のある地域範囲内）	0~2Km		0 ～ 4Km バーネハーゲの近くで働いている人は遠くからくる．		100m-2km	50m-1km
2-8) 食事（給食／弁当）	朝食，昼食，弁当	週１回給食（保育料に含む） それ以外は弁当		両方行っている．12 時にパンか温かいランチ，フルーツを作っている．弁当は各自持参．	給食	給食	給食
3-1) 最初の子どもがくる時間	7:30	7:30	7:30	7:30	6:30	6:30	6:30
3-2) 子どもが最も多く来る時間帯	9:00-10:00	9:00		8:30	9:00	9:00	before 9:00
3-3) 最も早く施設を出る子どもの時間						12 時に２人	15 時に 10 人
3-4) 子どもが最も多く帰る時間帯				16:00:00 15-16 時に 25% 16 時前後に 50% が帰る．	16:00-16:30	17:30	16:15
3-5) 最後の子どもが帰る時間				16:45	18:00 に２～３人		17:30 に３～４人

E. スウェーデンの保育施設における環境行動の所見

実測調査を行った調査地の中でも，スウェーデンの半日全日保育一元化後の就学前保育施設「フォーシュコーラ」における調査を行った．

調査日は2007年8月下旬の3日間に行い，1. 什器や室の寸法・設え・人数・プログラムの把握を含んだ施設環境調査，2. 子どもやスタッフを平面図上に記す行動マッピング調査，3. 前調査の補完，および，スタッフへのヒアリング調査，から構成されている．

ここで示す行動マッピング調査は，調査員3名が従事し，調査日に子どもが施設内にいた時間帯（7時10分から16時30分まで），10分ごとに施設敷地内にいる全員の居る場所とその時の活動を平面図上に記録するものである．その際合わせて，所属するグループ（3歳以上グループか3歳以下グループかの違い），性別，姿勢，行動などを判別できる範囲で記録した．天候は晴れであった．（上記調査の施設環境調査やヒアリング調査は別途本報告の末尾に記す．）

E-1. 場所人数の時間変化

10分ごとに平面図にマッピングしたものをもとに，施設敷地内の様々なエリアごとの人数変化を分析した．エリア分けとその名称を表3に記す．また，表3のエリア番号を図1に黒文字で示した．エリア分けは，室や設えに準じており，その室や設えの内部にいるもの，もしくは設えに関わる物理的対象に従事する者をカウントした．その結果が表4である．

昼食や午睡などのプログラムは一斉活動として行っていた．表4での大きな円が連続している部分がその時間帯である．日本の保育園と同様なことがわかった．

しかしながら，日本では見られにくいと思われる表4の特徴がある．「小さな点が多い」ことである．つまり，一人で過ごしている子どもが多いということである．

考えられる要因としては，日本の保育施設よりも保育施設の人口密度が小さい，あるいは1人あたりの面積が大きいことがいえる．

さらに表3をもとに，番号をつけたエリアに1人でいたものを平面図上に累積したのが図1である．黒い円中の白抜きがその累積度数である．この図からは，屋内外関係なく，一人で居られる場所が選択されていることがわかる．

F. スウェーデンの保育のこれから

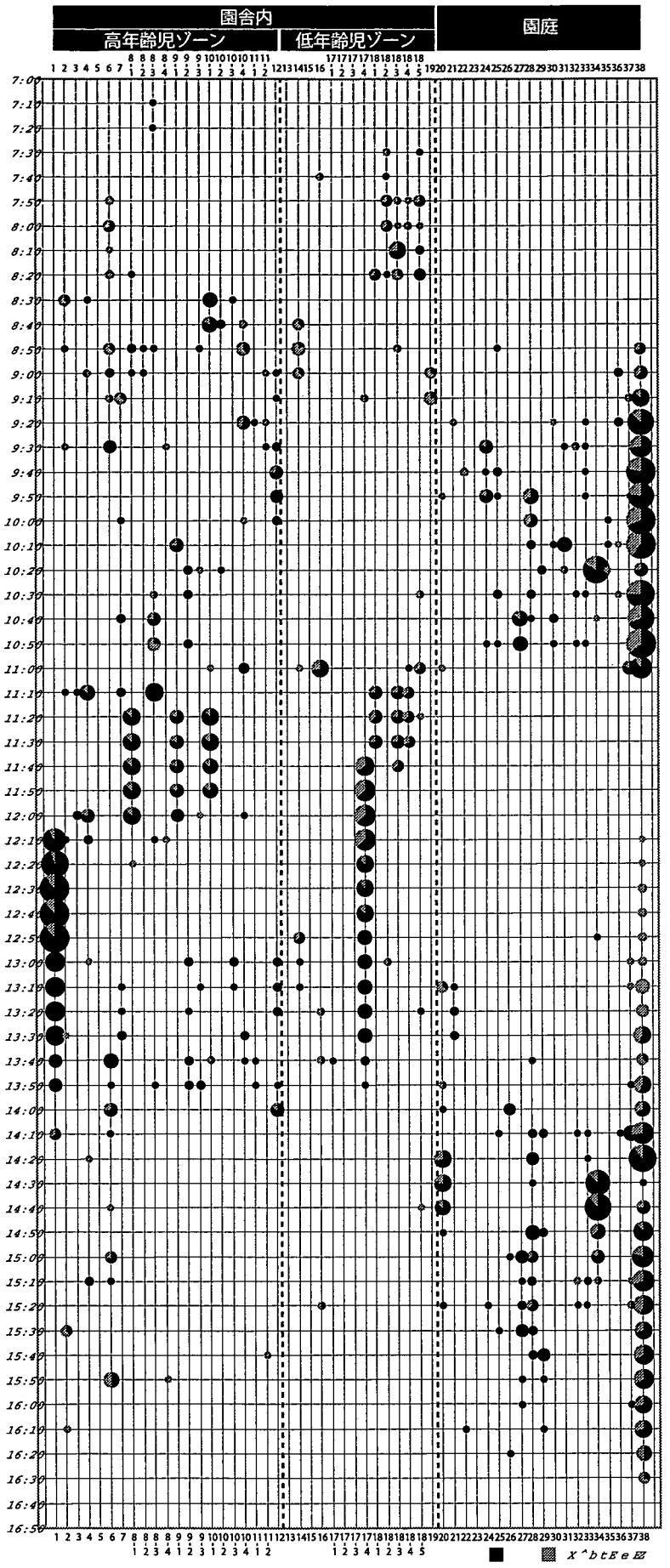
既に全日保育と半日保育が一元化された「スウェーデンの就学前保育の問題点や課題」についてスウェーデン教育大学のイングリッド先生にインタビューをおこなった．それをまとめて報告する．

先に述べたように，1975年に全日と半日の保育が一元化された．その後，70年代の後半から80年代にかけて保育施設が整備され，現在の就学前保育施設環境が確立された．1990年代は，スウェーデンの社会システムが大きく変化した．その中でも1996年に就学前保育施設の管轄が社会省から教育省に移管された．この移管から，就学前保育施設に対する考え方が，学校と同様に扱われ始めたことが問題となっている．それまで就学前保育施設は，表5の左側のように捉えられてきたが，教育省に移管されて右側の様な捉えられ

表3．エリアの名称（表4のエリア番号一覧）

1: 午睡室	11-1: アトリエ	23: コンクリート水流し場
2: 廊下	11-2: アトリエ	24: 砂場
3: トイレ	13: トイレ	25: 砂場
4: 手洗い（トイレ前室）	14: ロッカー・ソファー	26: 屋根付き遊具
5: 棚	15: 保育室15	27: 廃棄タイヤ
6: エントランス	16: 沐浴他	28: 屋根付き巨大遊具
7: 保育室7	17-1: 遊具棚17	29: 物置
8-1: ダイニングテーブル	17-2: ソファー	30: 砂場
8-2: 遊具棚	17-3: 円絨毯	31: 屋根付き遊具
8-3: 本とソファー	17-4: 17他室内	32: シーソー
8-4: 8室内その他	18-1: ダイニングテーブル	33: シーソー
9-1: ダイニングテーブル	18-2: スポンジソファー	34: 切り株椅子
9-2: 円絨毯	18-3: ダイニングテーブル	35: 屋根付き遊具
9-3: 9室内その他	18-4: ダイニングテーブル	36: 物置
10-1: ダイニングテーブル	19: 保育室19	37: スロープ
10-2: ブロック	20: デッキ（半屋外）	38: その他屋外
10-3: レゴブロック	21: テーブル	
10-4: 10室内その他	22: 屋根付き遊具	

表 3. バーブローデンフォーシュコーラにおける場所人数の時間変化



方をすることが強くなった．一人一人が見守られてきた状態から，いかに事柄を教えるかが議論となってきたのだ．

G. 調査を終えての所感

ここからはあくまで筆者の感じたことにすぎないが，実測調査を行った中で，新築の施設２つだけが他の保育施設とは違った側面があることを発見した（別紙，実測調査資料を参照）．施設の収容人数が多く，かつ，ほぼ全員が座って集まれる広い部屋，ランチルームがあることだ．その新しさには新鮮さを感じることはなく，むしろ，日本と同じような部分を感じた．昨今，日本では，幼稚園，保育所，幼保一体化施設，認定こども園，様々な形態があるが，その中には待機児童を収容させ，少ない保育者を用いて一斉に何かをさせている施設が多いように思える．全員が集まれる場所には，意味や価値は十分にあるが，今回の分析で見つけた，１人で取り組める場としての保育施設環境は今後の日本の保育施設の１つの課題ではないかと考えている．

H. 研究発表

H. 1　論文発表

本論文は，加筆・修正の上，日本建築学会技術報告集への投稿を予定している．

H. 2　学会発表

本論文は，一部をとりあげて，日本建築学会大会での口頭発表を予定している．また，本稿の一部を用いてこども環境学会での口頭発表を行う．

表５．就学前保育施設（96 年まで）と学校（96 年以降）の違い

プレスクール	スクール
子ども	児童生徒
pedagogue	teacher
活動	授業
屋外教育？	休暇
促進する，学ぶ	事実を教える
フォローや サポートをする	評価付けや ランク付けをする
あそび	？学ぶ？
一緒に学ぶ人	個人的な形態
世話，保護	弟子管理

注）スウェーデン教育大学イングリッド先生のメモをもとに作成した

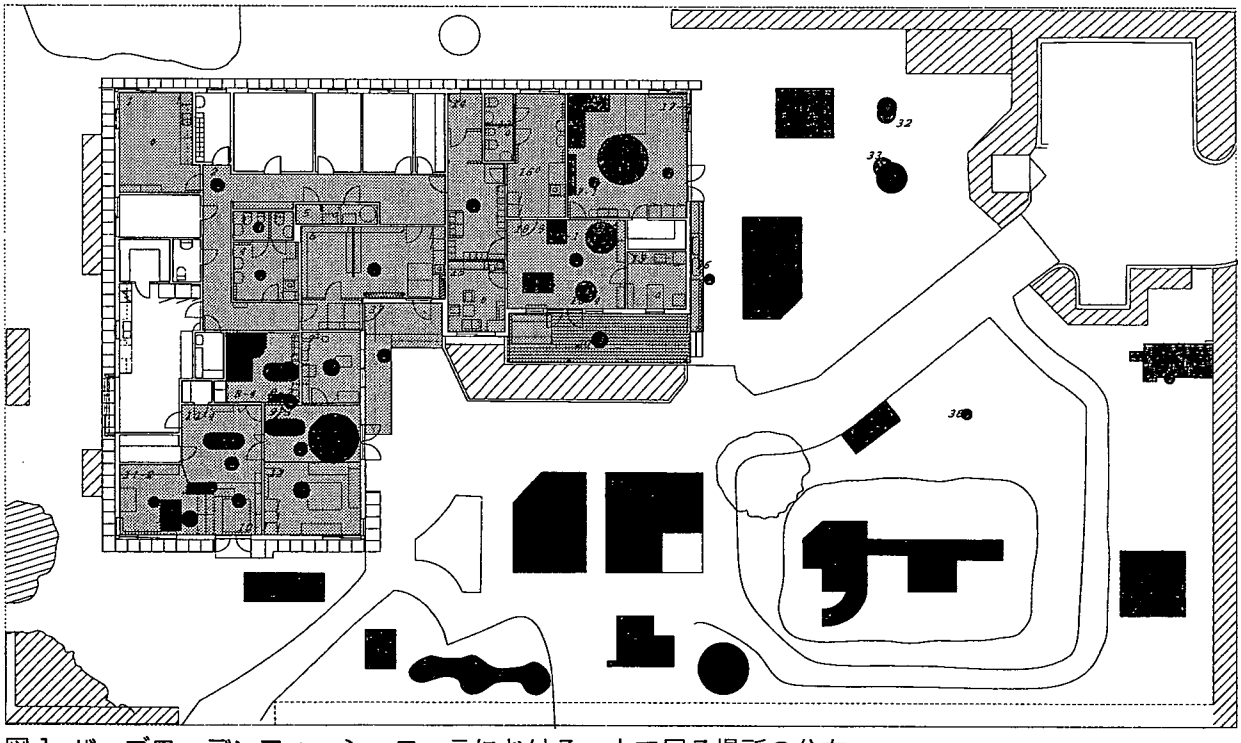


図１．バーブローデンフォーシュコーラにおける一人で居る場所の分布

■参考文献

1）財務総合政策研究所「主要諸外国における国と地方の財政役割の状況」2005年12月，財務省（http://www.mof.go.jp/jouhou/soken/kenkyu/zk079.htm）

2）山田敏「北欧福祉諸国の就学前保育」明治図書出版，2007年5月

3）鵜飼明香「スウェーデン幼児教育の制度・政策に関する歴史的研究」，名古屋市立大学大学院修士論文，2008年

4）Skolverket(Swedish National Agency for Education)「Pre-school in transition, A national evaluation of the Swedish pre-school」, A SUMMARY OF REPORT 239, 2004

5）Skolverket(Swedish National Agency for Education)「Descriptive data on pre-school activities, school-age childcare, schools and adult education in Sweden 2006」, Swedish National Agency for Education report no.283, 2006

資料１）訪問した保育施設の概況

Nor-01. ブレイガータバーネハーゲ（オスロ）

■調査の位置づけ

集合住宅の１階、中庭の３分の１程度を利用する都市型のバーネハーゲである。

■設立

1-1) 設立年・認可

不明

1-2) 現在の建物

集合住宅の１階を利用している。。

1-3) 敷地・建築面積

集合住宅の建築面積は約 4500 ㎡の６階建てで述べ床面積は推定 27000 ㎡。そのうち、保育施設は約 1000 ㎡を利用し、中庭の３分の１を柵で囲み、保育施設の専用庭として利用している。

■運営

2-1) 受け入れ年

１歳～６歳

2-2) クラス構成

１歳から３歳までの９名と、３歳から６歳までの 18 名の２つ。

2-3) スタッフ

各クラス３名ずつ

2-5) 運営時間

7:30-17:00

■生活

3-1) 最初の子どもが来る時間

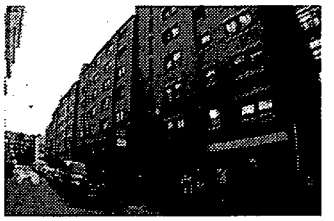
7:30

3-2) 子どもが最も多く来る時間帯

９時～ 10 時

3-9) 子どもに最も人気のある場所

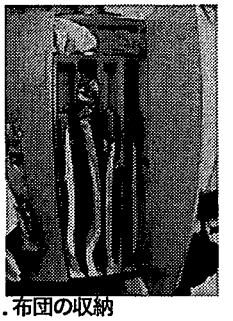
園庭



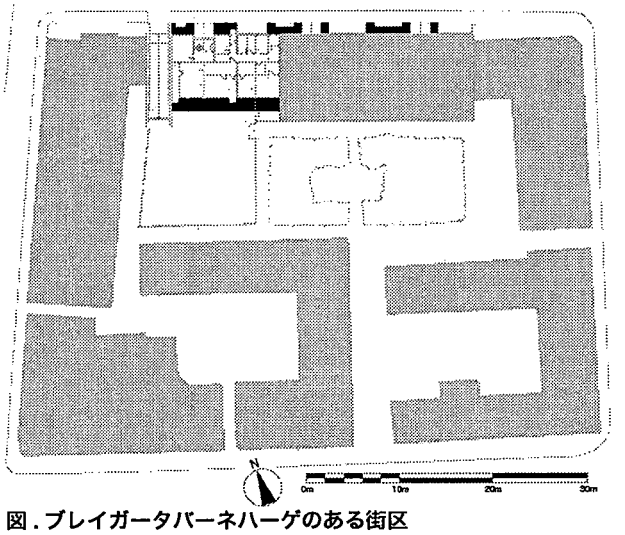
写真．ブレイガータバーネハーゲの入っている集合住宅
写真正面１階がバーネハーゲ部分

写真．バーネハーゲの庭
集合住宅の庭に柵を設け、中庭の３分の１をバーネハーゲ用の専用庭として使用している。

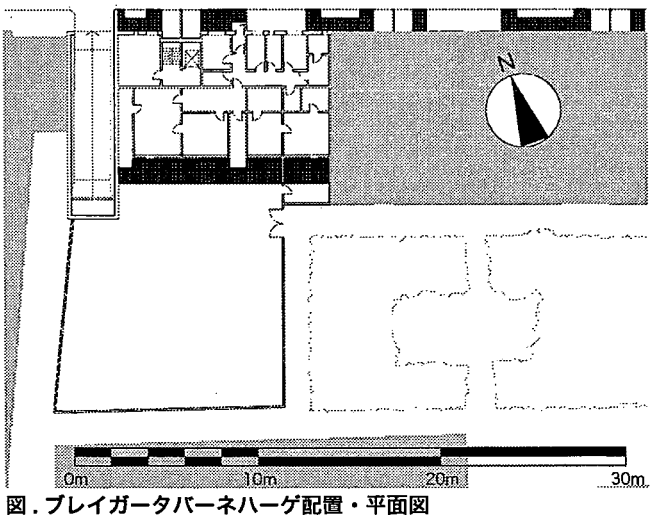
写真．庭からの入り口・乾燥室



写真．布団の収納
午睡用の布団はスポンジ質で、ロッカーに立てて納められている。



図．ブレイガータバーネハーゲのある街区



図．ブレイガータバーネハーゲ配置・平面図

Nor-02. ハンスホーゲンバーネハーゲ（オスロ）

■調査の位置づけ

公園の敷地内にあり、緑に囲まれた保育施設

■設立

1-1) 設立年・認可

1958 年（1995 年に公立化）

1-2) 現在の建物

不明

1-3) 敷地・建築面積

■運営

2-1) 受け入れ年

２歳半～６歳

2-2) クラス構成

月齢順に並べ、17 名と 16 名の２クラスに分けている。

2-3) スタッフ

ボス２名、先生２名、アシスタント２名

2-5) 運営時間

7:30-17:00

■生活

3-1) 最初の子どもが来る時間

7 時

3-2) 子どもが最も多く来る時間帯

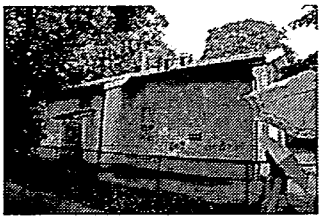
9 時

3-9) 子どもに最も人気のある場所

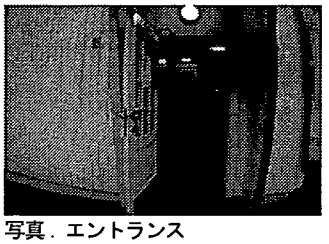
・女子は、園庭にある小さな小屋

・男子は、列車のおもちゃ

写真．ハンスホーゲンバーネハーゲの外観（南西方向）

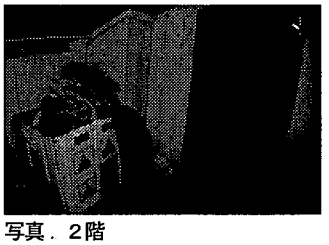


写真．ハンスホーゲンバーネハーゲの外観（西方向）



写真．エントランス

写真．２階保育室

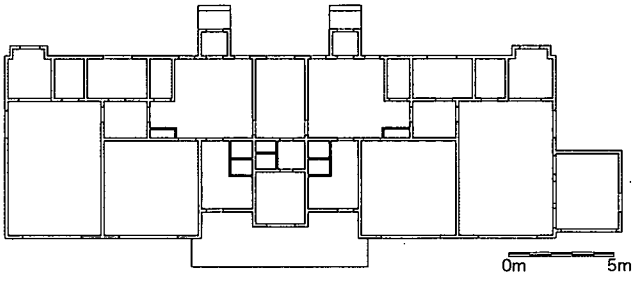


写真．２階
保育室脇の空間。傾斜した屋根が迫り薄暗くなっている。

写真．中２階ロッカースペース

写真．２階食事の様子
幼児５ー６名が１つのテーブルにつく

写真．１階保育室の様子
低めの家具が多い



図．２階平面図

Nor-03. メルケバイエンバーネハーゲ（オスロ）

■調査の位置づけ

住宅を改修して使っている事例

■設立

1-1) 設立年・認可

2006 年 8 月

1-2) 現在の建物

1881 年に建った住宅を改修して使っている。

1-3) 敷地・建築面積

建築面積は約 100 ㎡。述床面積は約 250 ㎡。

■運営

2-1) 受け入れ年

1 歳～ 6 歳

2-2) クラス構成

1 歳から 3 歳まで 35 名（1 階）、4 歳から 6 歳までの 35 名（2 階）。

2-3) スタッフ

先生 7 名、アシスタント 11 名

2-5) 運営時間

7:30-17:00

■生活

3-1) 最初の子どもが来る時間

7:30

3-7) スタッフが建物で好きな場所

天井が高くて気持ちいい

写真 . 保育室内その 1
保育室内は家具で分節されている。

写真 . 保育室内その 2
コーナーにスポンジのソファを置いていることが度々見られた。

写真 . 保育室内その 3
保育室内は家具で分節されている。

写真 . 保育室内その 4
家具で囲われた内部には、机と椅子のセットが置かれていることが多い。

写真 . メルケバイエンバーネハーゲ
道路よりも高台に建っている。西側より撮影

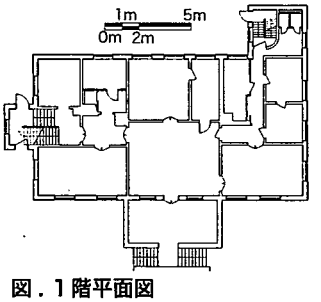


図 . 1 階平面図

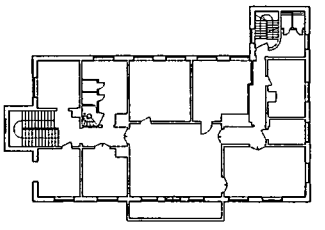


図 .2 階平面図

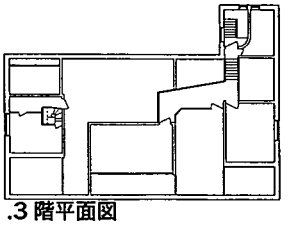


図 .3 階平面図

Nor-04. ボヨルセンバーネハーゲ（オスロ）

■調査の位置づけ

オスロ郊外に位置する。

■設立

1-1) 設立年・認可

1920 年に教会の保育施設として開設。現在の名は 1952 年から。

1-2) 現在の建物

1997 年に 1 階建てだった建物に 2 階を増築した。

1-3) 敷地・建築面積

隣接する公園との境目に高さ 1m の壁

■運営

2-1) 受け入れ年

1 歳～6 歳

2-2) クラス構成

1 クラス 1 8 名
2 クラス 1 8 名
3 クラス 1 2 名

2-3) スタッフ

1 クラス 3 名
2 クラス 4 名
3 クラス 4 名

2-5) 運営時間

7:30-17:00

2-6) 子どもの通園圏

0～4 km。このバーネハーゲの近くで働く人は、遠くから通勤してきている。

■生活

3-1) 最初の子どもが来る時間

7:30

3-2) 子どもが最も多く来る時間帯

8:30

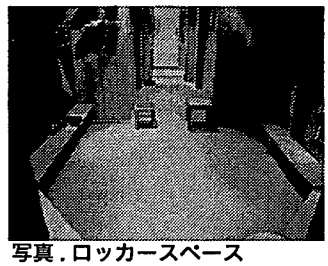
3-4) 子どもに最も多く帰る時間

15-16 時に 25%、16 時前後に 50% が帰る。

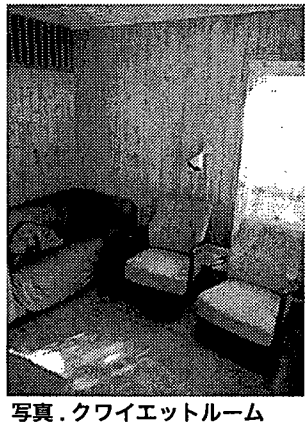
写真．ボヨルセンバーネハーゲの外観
庭南西から撮影

写真．ボヨルセンバーネハーゲの外観
庭南東から撮影

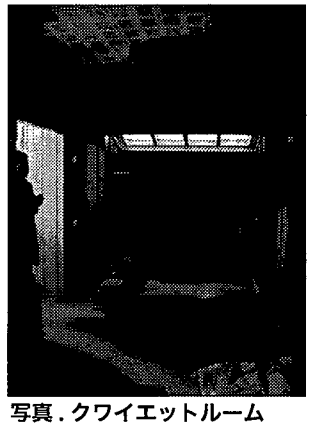
写真．南側の庭から公園を眺める



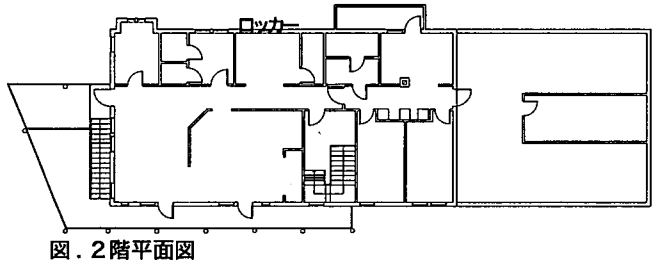
写真．ロッカースペース
中央の椅子に保育者が 2 人座り幼児を集める場面があった。



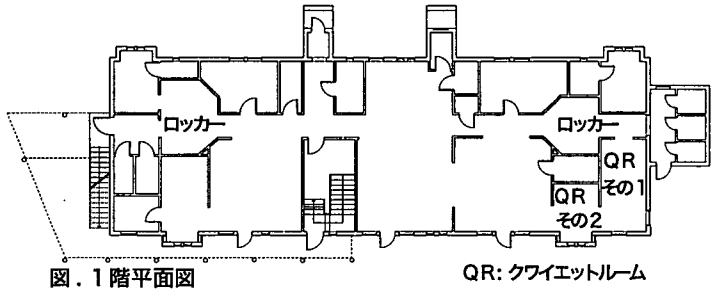
写真．クワイエットルーム その1



写真．クワイエットルーム その2



図．2 階平面図



図．1 階平面図　QR: クワイエットルーム

Swe-01. バーブローデンフォーシュコーラ（ストックホルム）

■調査の位置づけ

半日全日が一元化された 1975 年以降の保育施設。スウェーデンの伝統的な保育施設のつくりといえるもの。

■設立

1-1) 設立年・認可

1981 年

1-2) 現在の建物

上記年に建てたと思われる。

1-3) 敷地・建築面積

敷地面積 2400 ㎡、建築面積 450 ㎡

■運営

2-1) 受け入れ年

1 歳～6 歳

2-2) クラス構成

1～2 歳児

3～5 歳児

2-3) スタッフ

先生 6 名、掃除 1 名、調理 1 名

2-5) 運営時間

6:30-18:00

■生活

3-1) 最初の子どもが来る時間

6:30

3-2) 子どもが最も多く来る時間帯

9:00

3-4) 子どもが最も多く帰る時間

16:00-16:30

働いていない親が多いので、（バーブロデンは帰宅時間が）早い方である。一般的な原則としては、親の働き方に応じて、6 時 30 分から 18 時 30 分の間は子どもを預かる義務がある。

3-5) 最後の子どもが帰る時間

18:00 に 2～3 人

Q. 滞在時間の異なる子どもに対して何か配慮をしていますか？

夜遅くなると少し静かに落ち着くように静かな環境をつくるようにしている。

小さなグループになった時、迎えにくるのが遅い子たちには、言葉のトレーニングなどをするようにしている。

Q. スタッフが建物で好きな場所

建物自体の立地条件。森、公園、学校に近い。

Q. スタッフが建物で不便だと感じる場所

使いづらいと思うのは、年少組と年長組が離れている配置である。長い廊下を通らなければならない。

場所を変えたい（建物内に手を加える）と思っている。もう少しオープンなスペースをつくりたい。オープンだけではなく、小さな個室もつくりたい。

Q. 子どもに最も人気のある場所

レゴブロックと粘土のコーナー

Q. 他の施設との交流

この地区では、5 つのフォーシュコーラ、1 つのオープンフォーシュコーラ、1 つのファミリーセンターが一つの枠組みとなっている。5 月の中旬（平日、日は特に決まっていない）の「フォーシュコーラの日」には、地域のカーニバルがあって、集まって一緒に遊んだりする。

Q. 3 歳以上の未満のグループをどのように決定しているか？

個々の子どもたちをみてその子が十分に発達していると感じれば大きな子どものグループ（3 歳以上のクラス）に移す。親とよく話して、小さな子どものグループ（3 歳未満のクラス）に残った方がいいと思えば残す。

6 歳の子が就学前クラスに行き、空きができる。その時に移動するのが自然な状態。

8 月で 3 歳になっていなくても、年長グループに移す。年少から年長に移る子だけではなく、引っ越しなどで入ってくる子もいる。

定員が多いと、3 歳が年少に居続けることもある。その時には、先生がその子たちにあった年長グループと活動させたりするなどの工夫をしている。

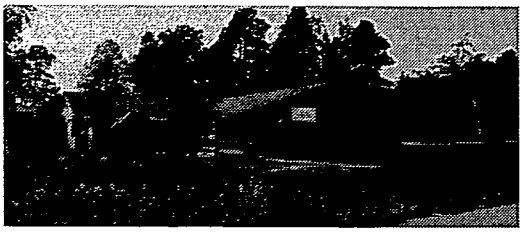
Q. 小学校での就学前クラスとの線引き

（小学校での）「就学前クラス」が始まるのは、8 月下旬。いつプレスクールをやめるかは、家族による。旅行に行く家族は夏休み前にプレスクールをやめる。

ここ数年、就学前クラスは義務教育となった。

6 歳児から小学 1 年生に飛び級することも可能ではある。

就学前クラスは 96 年に教育庁に入った。その時に 40 分の授業（活動 activities）と 40 分の休みの組み合わせのサイクルを導入しようという議論がでてきた。



写真．バーブローデンフォーシュコーラ外観
隣の敷地（写真奥、西側）には、小学校が建っている。

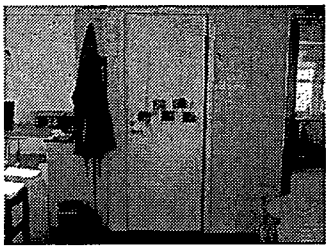
写真．絵を描く場所
１人で絵を描くことに夢中な幼児がいた。

写真．ダイニングテーブル
大人サイズのダイニングテーブルに集まってゲームをしている。こども用サイズの椅子（左）、大人サイズの椅子（中央下）

写真．午睡室専用の部屋
ふとんは敷いたままが多い。

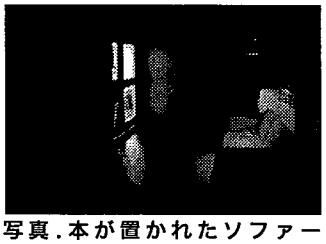
写真．３歳未満児グループ保育室

写真．子どもによる施設評価
子どもの好きな場所の写真に選択バサミをくっつける。

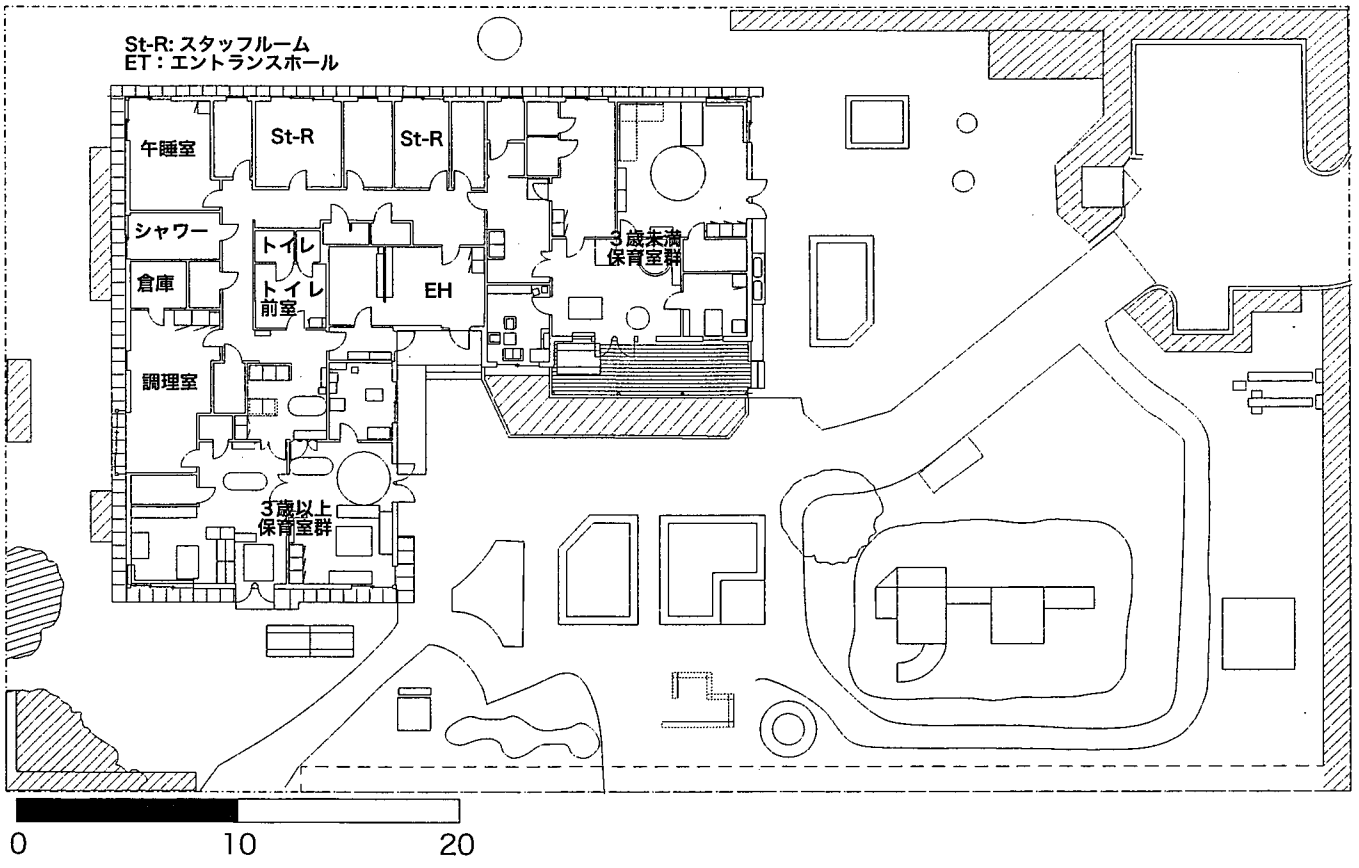


写真．子どもによる施設評価
写真中央に扉に張っているのが、右の写真

写真．本が置かれたソファー
昼寝できない子がここに座って本を読む



写真．本が置かれたソファー（右）、ロッカースペース（左と奥）
昼寝できない子がここに座って本を読む



Swe-02.Förskolan Griffeltavlan（ストックホルム）

■調査の位置づけ

最新のフォーシュコーラ。

■設立

1-1) 設立年・認可

2006年4月

1-2) 現在の建物

2006年4月に新築

1-3) 敷地・建築面積

敷地面積3800㎡、建築面積859㎡

■運営

2-1) 受け入れ年

1歳～6歳

2-2) クラス構成

4クラス　合計70名

2-3) スタッフ

先生12名

2-5) 運営時間

6:30-17:30

2-6) 子どもの通園圏

100m - 2km

■生活

3-1) 最初の子どもが来る時間

6:30

3-2) 子どもが最も多く来る時間帯

9:00

3-3) 最も早く施設を出る子どもの時間

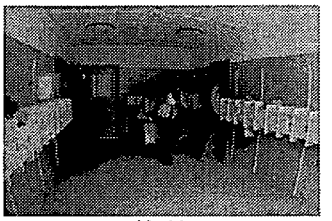
12:00に2人

3-4) 子どもが最も多く帰る時間

17:30

写真．南側エントランス外観

写真G1. 南側エントランス



写真G2. 着替え用ロッカールーム

写真G3. 午睡室

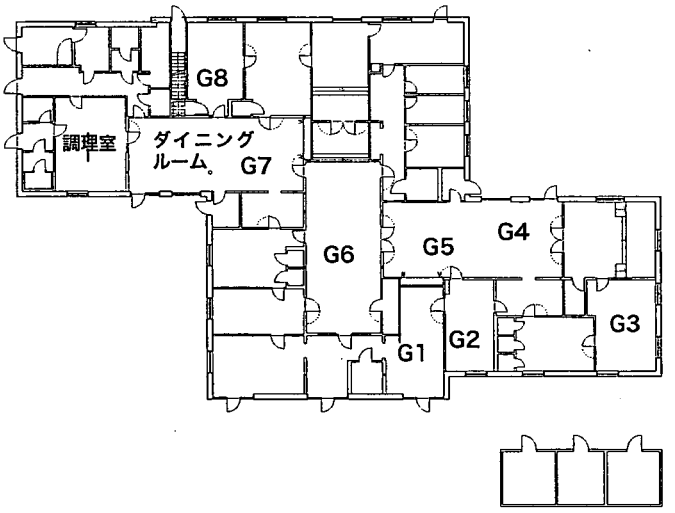
写真G4. 保育室

写真G5. 保育室

写真G6. 保育室

写真G7. 食事室

写真G8. アトリエ



図．平面図